

アフリカの非正規市街地をフィールドとした持続型都市社会モデルの構築

Creating a Model for Sustainable Urban Society Based on the Field Study of Informal Settlements in Africa

プロジェクトリーダー 木多道宏(社会ソリューションイニシアティブ企画調整室長/工学研究科教授)

学内のコメンター

栗本英世(人間科学研究科教授) 澤村信英(人間科学研究科教授) 杉田映理(人間科学研究科准教授) 佐藤廉也(文学研究科教授)
中内政貴(国際公共政策研究科准教授) 仲尾周一郎(言語文化研究科助教) 辻寛(COデザインセンター特任助教) 土井健司(工学研究科教授)
下田吉之(工学研究科教授) 眞田靖士(工学研究科教授) 下田元毅(工学研究科助教) Seth Asare Okyere(工学研究科特任助教) 杉田美和(SSSI特任研究員)

1. プロジェクト概要

非正規市街地・スラムの改善は、1960年代より世界的な課題となりましたが、抜本的な解決策が進まず、アフリカ、中東、南・東南アジア、中南米の開発途上国でいまだに深刻な問題となっています。構造物の除却・再開発といった従来の手法では解決の糸口を見出せず、むしろ自律的に街や地域を運営するための社会・経済システムのデザインと再構築が必要であるとの考えに至り、栗本英世教授をはじめとする文化人類学の研究者、そして、地理学、国際公共政策、言語学、都市計画、環境エネルギーを専門とするメンバーからなる横断型のプロジェクトチームを組織しました。

ガーナ・アクラを共同の研究・実装フィールドとして、メンバーの複数のフィールドの活動も並行することにより、相互に比較検証しながら共通の課題解決策を見出すことが、本プロジェクトの目的です。

アクラには、82カ所の非正規市街地があり、アクラ市人口の約60%が居住しています(図1)。政府による抜本的な対策はなく、貧困、火災、水害、コレラの蔓延など、深刻な問題を抱える地区も多く見られます。従前の現地踏査の結果、比較的良好な自律的運営がされているLa地域を発見し、社会・空間構造や住環境運営の仕組みの解読を進めつつあります。今後は、地区の人々とともに課題を解決しながら持続型都市社会モデルへと進化させ、他の劣悪なスラムへの応用が可能な制度を検討していく予定です。

2. プロジェクトの意義

これまでの調査により、La地域における、チーフを中心にクラン(父系血縁集団)が協調しながら住環境を運営する伝統的な「チーフ・クランシステム」の存在と役割を明らかにしつつあります。土地を「神か

ら与えられた共有の資産」と考え、土地の活用方法を相談しながら決めることにより、共用性や公共性を考慮した土地利用が維持されています。

一方で、アクラ全体を俯瞰すれば、チーフをはじめとする地元有力者が、先祖伝来の土地を外資系ディベロッパーに売却し、グローバル経済主義的な乱開発が生じています。開発による利益は欧米や中国本国へと回収されるため、ガーナの経済に貢献するものではありません。

La地域においてチーフ・クランシステムの影響力が残っている間に、現代的な都市や社会の課題に対処できるような自律的な課題解決の機能を身につけることができれば、人間関係と住環境の破壊を招く近代的な都市開発に代わって、それらをまもりはぐくむ新しい都市開発のモデルをガーナ全体に対してのみならず、世界に示すことができると考えています。



図1: アクラにおける非正規市街地と活動地区
濃いグレーが非正規市街地を指す。La地域は大阪大学が初めて調査に入ること認められた。行政機関は手をつけられないため、大阪大学の活動に期待している。

ガーナから世界に提案する新しい「都市開発」のモデル



清掃ワークショップ

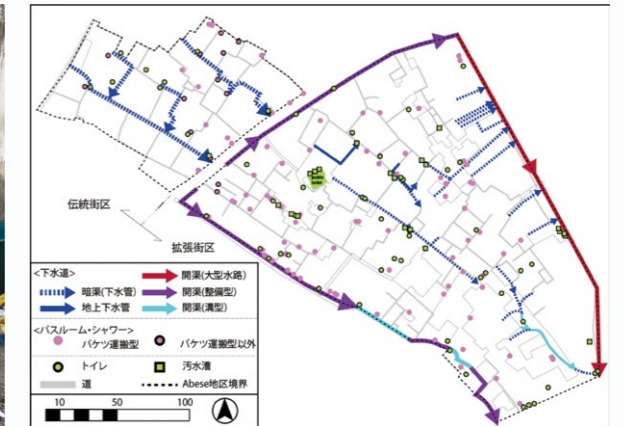


図2: Abese地区における水・衛生施設の分布

3. 2018年の取り組みと成果

La地域は八つのコミュニティからなります。2018年度は、その一つであるAbese地区の調査を実施しました。街路の測量と地形図を作成し(行政では非正規市街地の地図は作成されていません)、社会組織、行事の運営、相互扶助の仕組み、住居の材料・構法と維持管理、水・衛生設備(上水、下水、トイレ、シャワーなど)の分布と維持管理、街路の舗装と維持管理、ゴミの収集・廃棄などの状況を把握し、また、50人を超える子どもたちに大切な場所の絵を描いてもらいました。

人々にとって最も切実な課題は、水・衛生環境の改善と就労の確保であることが分かりました。下水道については、一部にコミュニティが敷設した暗渠型の下水管がありますが、地面に溝を掘っただけの「開渠(溝型)」、もしくはブロック等により形成された「開渠(整備型)」など簡易なものが多く、地中への下水の浸透や臭気など、衛生面の問題があります(図2)。シャワーの排水もバケツにより人力で運搬するため、大きな負担となっています。

就労については、建設関連の日雇いを収入源としている人が多く、収入が不安定です。クランごとに、一人当たり毎月0.5から1セディ(10円から20円程度)を供出し合っていますが、衛生環境の改善には程遠い状況にあります。

12月8日・9日には、これらの調査結果と提案を科学研究費基盤Sプロジェクト「アフリカ潜在力」のアフリカフォーラムで発表し、アフリカにおける都市

開発の課題を共有するとともに、欧米の構築した近代的制度から外れた「非正規性」こそがアフリカの潜在力であるとの合意形成に貢献しました。

3. プロジェクトの今後

伝統コミュニティが、まちづくりの手法により人々の地域への愛着や責任を醸成しながら、水・衛生環境の改善を推進する価値共創型のコミュニティ企業(CbC: Community based Company)を立ち上げることを支援します。公共機関に対してCbCをプロモートし、経営の安定化を図り、収益をコミュニティでシェアすることにより、自律的な市街地環境改善のコミュニティモデルを構築することを目標としています。

2018年11月には、過去4年間にわたる活動が評価され、木多教授とメンバーが開発担当チーフ(キング)とクイーンに任命されました。地元コミュニティから大きな期待を受けながら、La地域の持続的改善を通して、アフリカや人類の抱える社会課題の解決に貢献していきたいと考えています。



開発担当チーフ就任式典後の記念撮影 (Abese地区)